ペット愛護新聞

岡山市・高松農業高２年

江口　茉奈実

ペット愛護新聞

2021年（令和3年）8月23日

江口 茉奈実

ペットを飼うなら最後まで

殺処分問題と、犬猫の現状について

コロナ以降、犬や猫を迎える新規飼育数が増加する。一方で、日本の犬猫の殺処分数は年間約3.3万頭にも及び、日々多くの犬猫が命を奪われている。メディアや著名人のSNSなどでも発信されることが増え、「保護犬」、「保護猫」の検索動向も2015年比で保護犬が5倍、保護猫が7倍まで増加し、保護犬猫から迎える文化が醸成されている。

保護犬猫から迎える文化が醸成される一方で、狭いスペースに閉じ込めて大量に繁殖させるなど悪質な事業者「パピーミル（子犬工場）」や「多頭飼育崩壊」等の存在が課題としてある。

殺処分数はここ10年程で約半分頭減少したものの、依然として、年間4万頭近くの犬・猫が犠牲になっているのが現状。殺処分問題に関する今後取り組むべき課題は、

①引取られるペットの数を減少すること

②引取られたペットを殺処分せずに済ませること

殺処分を減らすための2つのポイント

ひとつ目は、飼い主や国民の意識の向上」

ふたつ目は、「引き取った犬猫の所有者への返還と適正譲渡の推進」

捨てられる命の悲しい理由とは

殺処分の主な理由として、ペットが高齢だから、離婚するから、子供がアレルギー、吠えるから、ブリーダー崩壊などさまざまな理由で行政に持ち込まれ殺処分される。

減少しているとはいえ、毎日10匹の命がとても安楽死とはいえない状況で亡くなっている。（一部の行政では二酸化炭素ガス処分苦しみを伴う処分方法）

吉備中央町に作られた保護施設

岡山（吉備中央町）にある犬猫保護施設「ティアハイム小学校」について紹介します。

モデル校となるドイツに動物保護施設がある。

ドイツがなぜペット先進国と呼ばれる主な理由ひとつ目は、ティアハイムと呼ばれる理想的な動物保護施設の存在だ。現在、ティアハイムは全国に500か所以上もあり、犬猫をはじめ、さまざまな動物たちが穏やかに暮らす。

ふたつ目の理由は、本格的な動物保護法制度にある。

さらに、憲法に「動物保護」が導入され、法律でより詳細なことが定められたことにある。

私たちに出来ること

殺処分を限りなくゼロにするためには保護犬猫と暮らす選択肢が当たり前の日本になること、猫のTNR活動が進むことが期待される。

殺処分をぼんやりとしか知らない人たちに、しっかり現実を伝えて知ってもらうこと、知らない人には、まずは知ってもらうことが大事だ。

感想

保護犬・保護猫の中には人による虐待や飼育放棄などのせいで心に傷を負っている子が少なからずいる。

法制度の物足りなさも課題ですが、ショップで安易にペットを購入してしまう消費者にも問題があると思います。

そういう消費行動が結果的に子犬・子猫の仕入れ先である一部の悪質な繁殖業者を助けてしまっているということを知って欲しいです。

さらに、動物愛護団体やボランティアに行き着くまでの段階では多くの犬や猫が「殺処分」されている現実もある。

イギリスやドイツに比べると先進国の中では動物に対して成熟していないと言われる日本。

保護犬たちの第二の人生

片や恵まれない命を救う活動も徐々にですが、実を結んでいます。自治体によっては、収容された犬猫を譲渡する活動に力を入れる努力をしたり、保護団体が殺処分になる運命の犬猫をレスキューし、新しい飼い主さんを探す活動が活発化している。もともとは、保護犬だったが訓練され災害救助犬や聴導犬、セラピー犬として活躍するようなケースもうまれている。ペットショップやブリーダーさんへ足を運ぶ前に、施設で新しい飼い主を求める犬や猫（保護犬・保護猫）との出会いを求める方が増えている。

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。